

# 京都の伝統工芸を学ぶための教材の開発（Ⅰ）

古郷彰治\*<sup>1</sup> 松井洋泰\*<sup>2</sup>  
福岡 崇\*<sup>3</sup> 石川光治\*<sup>4</sup>  
伊藤圭一\*<sup>5</sup> 大入達男\*<sup>6</sup>

## 〔要 旨〕

京都の伝統工芸産業の振興のための一つの重要なポイントは「良さをわかってもらう」ことである。そのために今回、ユーザーを育てるという視点から、伝統工芸品の奥深さを知ってもらうための教材の開発に取り組んだ。教材といっても従来からあるような無味乾燥な「見本」ではなく、楽しみながらより理解を深めるための「標本」的なものをめざして、基本コンセプトの構築と基本デザインの作成、その上でまずは京漆器、京焼・清水焼について実施デザインを展開し試作をおこなった。

## 1 緒言

### 1-1 研究の目的

豊かな歴史と文化の中で生まれ研ぎ澄まされてきた京都の伝統工芸産業の振興のための一つの重要なポイントは「良さをわかってもらう」ことである。せっかくいいものがあるのに、その良さを知ってもらうためのアプローチをしない、あるいは例えたととしても作り手や売り手側の価値観や思い込みの一方的な説明に陥りがちで、結局は使い手（＝消費者）が魅力に感じることに、興味を持っていること、本当に知りたいことを伝えられていないという現状が多く見受けられ、それが顧客の開拓や需要拡大の大きな障壁となっている。この解決にはデザインを活用しての様々なアプローチ

が考えられるが、その中で今回はファンづくりという側面からのユーザー開拓の一つの方法として、上質な工芸品の魅力を感じられる消費者、価値を認められる消費者の育成を目的に、伝統工芸を知ってもらうための教材の開発に取り組み、試作を行った。

### 1-2 研究の背景

古来、京都の職人達の技術や意匠力は、貴族や武士の支配階級、豪商などの見識や美意識に基づく強力なディレクションによって磨かれてきた。ところが昭和20年以降の産業の発展に重点を置いた極端な施策の下で、ネガティブな側面として、本質の伴わない商品が氾濫し、モノの良し悪しに対する消費者の見識あるいは厳しさが薄れていった。これは京都において顕著で、京都の町衆が本来持っていた「目利きパワー」の急速な減退を招いた。

その結果、日本を代表する工芸都市・京都に暮らしながら、例えば磁器と陶器の違いが分からない、例えば西陣織と京友禅と丹後ちりめんの違い

- 
- \* 1 産学公連携推進室 主任研究員
  - \* 2 産学公連携推進室 技師
  - \* 3 産学公連携推進室 技師
  - \* 4 株式会社石川漆工房 代表取締役
  - \* 5 有限会社平安陶花園 代表取締役
  - \* 6 株式会社大入 代表取締役

が分からない、といった状況が、将来の潜在的ユーザーであるはずの子どもたちはもちろん、大人たちの間にさえも認められるようになった。例えばお茶の稽古で「おぬりは?」「ソーテツでございます」というフレーズを幾度も口にしながら「ソーテツ」が何を意味するかを知らない、そういう笑い話のような状況が珍しくもなくなってしまった。その大きな要因は学校教育（特に初等教育）や生涯教育における伝統産業や工芸産業の「学び」のシステムやプログラムの縮小あるいは不在が考えられる。その結果、とにかく自身の鑑識眼に自信を無くしてしまった消費者にとっての上質な工芸品というのは、その価格に、あるいは有識者の評価に「へえ」「ほう」と感心するだけの対象になってしまった感がある。そんな中で今、目利きの楽しみを消費者の手に取り戻すための「学び」のシステムやプログラムが必要であり、ひいてはそれが将来のヘビーユーザーを育て、京都の伝統工芸産業の振興につながると考えるものである。

例えば今まで1客2万円という漆のお椀を見て「へえ、高いなあ」としか反応しなかったのが、その魅力や価値が分かると「ええなあ。う〜ん2万円か。これだけの仕事があつたら仕方ないなあ」「毎日使うもんやし、思い切って買おか」という反応ができるようになる。工芸都市・京都に住まう町衆は子どもからお年寄りまで「京都の工芸」について、暮らしを通して肌で知っている、改めてそういう状況になることで、作り手にとっても使い手にとっても豊かな暮らしの実現へとつながるものとする。

## 2 研究方法

### 2-1 基本コンセプトの構築

さて、「学び」のシステムやプログラムと言っても具体的にはさまざまなアプローチが考えられる

が、その中で今回は「教材」を切り口とし、さらには「楽しみながら学ぶ」を絶対条件とした。具体的には次のような要件を備えるものである。

- ・従来からあるような無味乾燥な「見本」ではなく、楽しみながらより理解を深めるられるような「標本」
- ・単に知識を得るのではなく、五感で感じ取れるようなもの
- ・工芸に込められた歴史、文化、経験、知恵、技術、意匠力などを理解できるもの
- ・意味もなくコテコテに飾り立てて価値を高めているのではなく、きわめて合理的で効率も兼ね備えた、日本人の美意識の結晶であることが理解できるもの
- ・完成品からでは窺い知れない、途中の製作工程をも学べるもの
- ・フタを開けた途端「うわあっ!(“▽”\*)」と目を輝かせるようなもの
- ・1個だけ取り出して、手の平にのせているだけで楽しいもの
- ・途中工程の標本も含め1個1個が京都の工芸品としてのクオリティ、完成度、魅力を持つものつまり、無味乾燥でどこか説教くさい「見本」「模型」といったイメージの教材ではなく、楽しみながら学べる、それ自体に所有欲を刺激するような魅力のある「標本」。そしてそれらの標本がぎっしりと箱に納められている。あたかも「京都伝統工芸標本箱」と呼ぶのがふさわしいような教材。これを今回開発すべき教材の基本コンセプトとした。

### 2-2 基本デザインの決定

前記のコンセプトを踏まえ、各標本のベースとなるユニットの基本デザインを創った。まずは京漆器を念頭において進め、以下のような要素を大

切にした。

- ・余計なイメージを抱かせない、プレーンな形
  - ・手の平にのせて愛でる、楽しむことができるような大きさ
- さまざまな形態や大きさを考え検討した結果、基本ユニットは一辺が1寸(30.3mm)の立方体とし、「いっすんキューブ」と名付けた。「いっすん」には次のような思いも込めた。
- ・日本文化の中で親しまれてきた「1寸」という基本単位を実感できる
  - ・今も工芸品の製造や取り引きで日常的に使われており、工芸品に対する理解を深めるにはぜひ実感してほしい単位である
  - ・日本の伝統文化の中でも現在まだまだ重要な単位である

次に、立方体の角の丸みについて検討した。各Rのモックアップを製作し、そこから受けるイメージを確認するという方法で進めた。一般に直角がだんだん丸くなるにつれて、そこから受ける印象は次のように変わっていく。

角	←————→	丸
ハード	←————→	ソフト
フォーマル	←————→	カジュアル
冷たい	←————→	暖かい
まじめ	←————→	あそび
堅くなるしい	←————→	親しみやすい

今回の教材に求められるのは、可愛らしさ、親しみやすさを備えつつも真面目さ、信頼感を感じさせるカーブであり、最終的に角のR(半径)は2mmに決定した。(図-1参照)

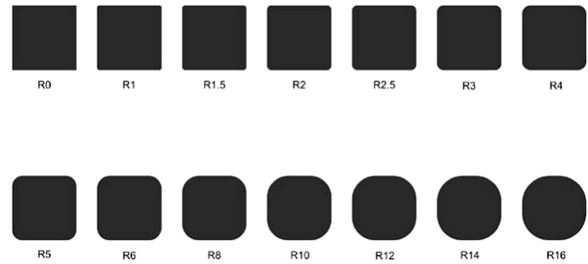


図1 角の丸みの違いによるイメージの差

## 2-3 実施デザインの展開

対象とした工芸品に施された各工程や技法を抽出した上で、重要性や面白さなどを考慮して、必要なアイテム=各標本を絞り込んでいった。

[京漆器編]

工程標本3種、技法標本4種

[京焼・清水焼編]

磁器の部：工程標本5種、技法標本5種

陶器の部：工程標本5種×2、技法標本1種、

釉薬の部：標本5種×2

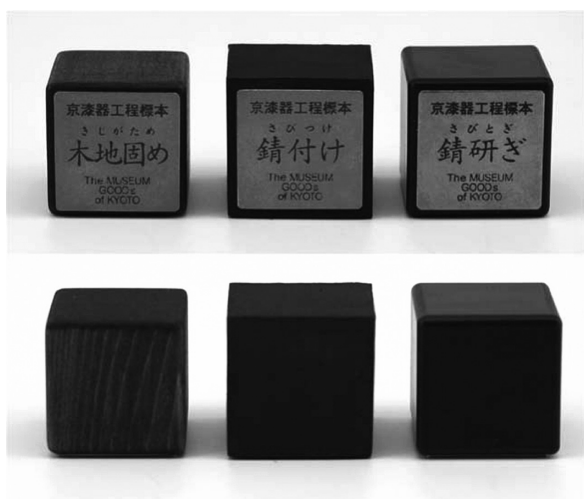
## 2-4 試作

実施デザインをもとに、それぞれの分野の職人さんと何度も検討を重ねながら試作を進めた。

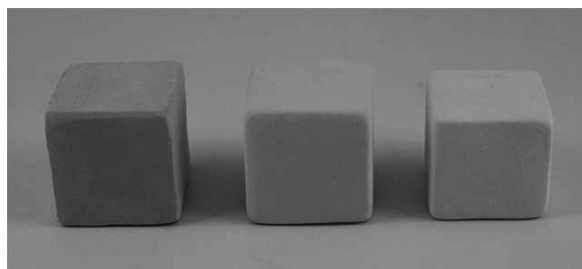
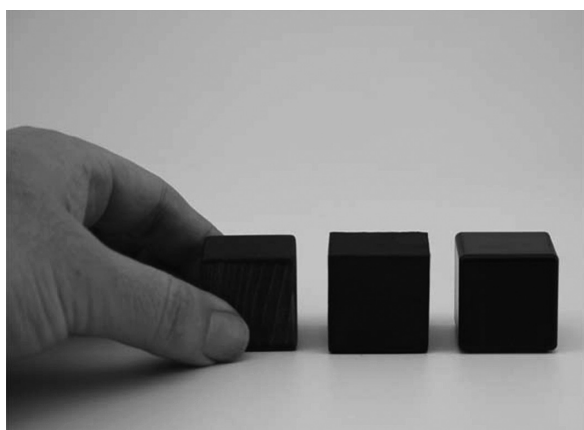
## 3 結果及び考察

奥深い京都の工芸には「語りたい」「伝えたい」「知って欲しい」要素がいくらかでもある。それをいかに整理し削ぎ落として「楽しく学ぶ」ための最終的なアイテムを絞り込むか。基本コンセプトを構築し基本デザインを決定して以降はこれが研究の重要なテーマとなった。そして試作を委託した企業からは「今までにない発想のモノである」「モノ自体が標本でありながら独特の魅力を持っている」「欲しい」など高い評価を得た。今後はさらに広い分野の各業種の職人さんと十分なコミュニケーションを取りながら、「京都伝統工芸票本箱」にお

けるそれぞれの分野の標本のアウトラインを作成し提案していきたい。また「京都伝統工芸票本箱」の活用場としては、主に社会科の伝統産業の授業の教材として京都の各小学校、さらには工芸品の販売促進のための説明用ツールとして各販売店等が考えられる。研究成果の普及を図るためにも関係機関と連携しアプローチしていきたい。



京漆器のいっすんキューブ。左から右へと工程が進む。木地に生漆を摺り込んだ「木地固め」（写真左）の段階では一辺が約27.5mmでもちろん仕上が寸法よりは小さい。ところがそれに麻布を着せて錆を付け下地工程の済んだ「錆付け」（写真中）の状態では一辺が約31.3mmと仕上が寸法より一旦大きくなる。そして「錆研ぎ」（写真右）されてようやく一辺が30.3mm、つまり1寸に仕上げられることが体感的に分かる。



こちらは京焼（磁器）のいっすんキューブ。左から右へ「乾燥」、「素焼き」、そして1寸角の「焼き締め」である。陶磁器は焼成すると収縮することはある程度知られているが、1寸角の立方体に仕上げるには、最初どれくらい大き目に作られているのかがよく分かる。もちろん「乾燥」「素焼き」「焼き締め」それぞれの色の変化や、実際に触れてみての表面の感触の違いなどが実感できる。



パッと見て「うわぁ(´▽`\*)」と目を輝かせるような標本。手の平にのせているだけで楽しくなるような標本。途中工程を含めて1個1個が京都の工芸品としての上質さ、完成度、そして魅力を備えている標本。そういう標本たちをぎっしりと納めた箱が「京都伝統工芸票本箱」。